シリーズ 城

審判部第17部門　深草 祐一

第十八回　鳥取城
～鳥取の渇殺し～

今回取り上げる鳥取城は、「鳥取の渇殺し」と呼ばれる羽柴秀吉の徹底した兵糧攻めで有名な城です。兵糧を食い尽くした鳥取城内は飢餓地獄に陥り、さながら餓鬼道の様子を見るが如き有様であったと伝わります。凄惨な描写も出てきますので、R18指定と思ってお読みください。

当時の状況

羽柴秀吉が鳥取城へ兵を進めたのは天正８年のことです。この頃、戦国最強と謳われた武田信玄、上杉謙信は既にこの世を去り、長年争ってきた本願寺も摂津から退去させた織田信長にとって、大きな危機は去ったといってよく､圧倒的優位な兵力をもって東は東海から武田を、北陸から上杉を攻め、西は四国の長宗我部、中国の毛利を下すべく、各方面へ麾下の軍団を進めようとしていました。去る天正５年に信長から中国方面の攻略を任された秀吉は、姫路城を拠点に播磨（兵庫県南部）の経略を進め、山陽道を備前、美作、備中（岡山県）へと勢力伸長を図りながら毛利本隊との決戦を企図しており、その際に側背となる但馬（兵庫県北部）、つづいて因幡（鳥取県東部）の勢力は是非下しておきたいところでした。

羽柴秀吉の因幡侵攻

当時の鳥取城主は、応仁の乱の西軍総帥であった山名宗全の後裔の一族である山名豊国であり、西からの毛利の圧力に耐えきれず、その傘下に入っていました。しかし、やがて東から織田の勢力が拡大し、但馬の山名本宗家は既に敗亡。中国方面軍司令官・羽柴秀吉の軍勢が支城を落としながら鳥取城へ迫ります。ただ、秀吉は叛旗を翻した三木城の攻囲をはじめ播磨での平定戦を継続中であり、周辺に付城を築いて鳥取城を囲んだところで一旦播磨へ戻っていきました。しかし数ヵ月後、再び侵攻してきたため、山名豊国はついに織田へ降ることを決めたのでした。ところが、多方面作戦に苛立ちをつのらせていた秀吉は、返答に時がかかり過ぎであるとして、当初の「今降れば因幡一国を与える。」との誘いを白紙にし、２郡だけの領有しか認めませんでした。豊国自身はこれも致し方なしと受け入れたようですが、因幡国人衆が納得せず、秀吉が播磨へ戻ると、豊国を退けて毛利へ助勢を請いました。豊国は追放されたとも逃げ出したともいい、後の鳥取城攻囲戦に織田方として参加しています。因幡国人衆は、毛利に対して徹底抗戦の意思を確認するとともに新たな城主として是非しかるべき大将を派遣してくれるように要請しました。そこで、名将の誉れ高い吉川経家が派遣されることになり、鳥取城は再び毛利方の最前線として織田軍団と戦うことになったのでした。

吉川経家の入城と凄絶な篭城戦

戦陣の経験豊富な吉川経家は、鳥取城に入るとただちに防御陣地の構築や兵糧の確認など、篭城戦の準備を采配しました。すると、城内には兵糧がわずかしか残されていないことが発覚します。先日、城下に若狭の商人が破格の高値で米を買い付けに来ていたため、鳥取城の家臣も喜んで米を売り払ったというのです。実は、これは先の播磨三木城攻めで篭城戦が長引いて苦労した秀吉が、その戦訓を生かし、予め敵の兵糧を減らすために仕組んだことでした（黒田官兵衛の策とも）。そして、次の稲穂が実る前に、秀吉軍２万が再度侵攻。鳥取城下の

鳥取城攻囲の様子

民衆にわざと乱暴狼藉を働き、城へ逃げ込むように仕向けた上で、鳥取城の東山麓に本陣を置き、城の周囲をぐるりと柵で取り囲んで、水も漏らさぬ包囲陣を敷いたのでした。経家は毛利へ兵糧の補給を要請していましたが、兵糧米を積んだ荷駄隊や船団はことごとく駆逐されてしまい、ついに鳥取城へ届くことはありませんでした。更に、秀吉は配下の宮部継潤に強襲をかけさせ、隣接する雁金山砦との連絡を遮断したため、鳥取城はいよいよ孤立無援の状態となります（宮部継潤はこの時の功により後に鳥取城を与えられています）。経家としては、なんとか持ちこたえて冬になれば、山陰の雪に耐えられず、秀吉軍は撤退せざるを得ないと考えていたと思われます。毛利の援軍も遅れながらも到着しつつありました。しかし、兵糧の不足は絶望的で、信長公記によれば、城内は次のような様子であったといいます。

「初めのうちは、数日に一度、鐘の合図とともに雑兵らが柵際まで出て、草木の葉を取っていた。稲の株がご馳走であったらしい。すぐにそれらも尽きてしまい、牛や馬を喰った。霜露にうたれて、餓死する者が際限なかった。餓鬼のようにやせ衰えた男女が柵際へ寄って、『出してくれ助けてくれ』と請い叫ぶ哀れなあり様は目もあてられなかった。そうした者を外に逃がさないために鉄砲で打ち倒すと、まだ息があるのに、手に手に刃物を持った人々が群がってきて、手足の節々を断ち切り、肉を貪り食うという始末であった。中でも頭がおいしいらしく、首を奪いあっていた。」

また、他の書物によれば、「死んだ我が子を人に隠し尻の下に敷き居てむしり食っていた。」とも伝わり、このような城内の様子に、経家は、自らの命と引き換えに城兵たちを救ってくれるように申し出ます。秀吉は、悪いのは山名豊国に従わず抵抗した重臣であり、経家の切腹は許さぬ旨回答しますが、経家は聞かず、重臣2名と共に従容として切腹。鳥取城は開城されたのでした。経家は本家の吉川広家宛てに、「日本二つの御弓矢境において忰腹に及び候事、末代の名誉たるべく存じ候」（日本を二分する戦場において切腹することは末代までの名誉と思う。）と書き送っています。当時の武士の価値観を表す言葉といえますが、縁もゆかりもない他国に来て思うにまかせぬ状況のために敗北するも、総大将としての筋目を通して責任をとった経家の姿は、鳥取城跡に立つ銅像とともに今に語り伝えられています。

開城後、秀吉は大鍋に粥を炊き出し、ふらふらになって出てきた城内の者に振舞いましたが、急に食べ物を腹に入れたため、大半の者が死んでしまったといいます。

現在の鳥取城

江戸時代初期にかけて築かれた立派な石垣が残る二の丸跡から山道をほぼ直登で登っていくと山上に本丸跡があります。そこからは鳥取市街が一望でき、北方には日本海、そして有名な鳥取砂丘も見渡せます。東山麓の太閤ヶ平（秀吉本陣跡）や雁金山砦など、秀吉勢が攻囲陣を敷いた地形もよく分かります。当時の飢餓地獄を思うとちょっと怖いですが、晴れた日には大変景色のよい所ですので、機会があれば是非登ってみて下さい。

本丸跡からの眺望